
武装生徒会～君と僕の日々～

どこかの天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武装生徒会〜君と僕の日々〜

【Nコード】

N7764F

【作者名】

どこかの天使

【あらすじ】

クラスメイトの告げ口で書記に立候補した僕、しかし生徒会室では学校同士のゲーム（戦争）が始まっていた連載を一時停止します。

第一話、僕と君の出会い

これは、とある中学の生徒会

書記の物語である。

「お前、立候補しちゃえよ」

と、クラスの後ろから声がした。

「えっ、無理だよ」

「先セー、中井がやりたいって書記」

「そ、そんな 事、言っていないよ」 控えめに僕は喋る・・・
勿論、先生にはまったく聞こえず・・・

立候補者にまでになった。

僕の名は中井益夫

成績も落第点ばかり採るような感じだ、

唯一、誇れるのは

顔と性格ぐらいだろう。

いや、自画自賛になるが

人様に言われただけの話だ・・・

僕はその後、廊下で思いに耽っていた。

「なに、やってるの・・・」

そこに居たのは綺麗なお姉さん、いや、現、生徒会副会長の清水さんだ。

彼女は学校始まって以来と、
言える程の美女で女子、男子ともにほとんどの票を持っていた有名人だ

事情^{ワケ}を聞くと

立候補する事を聞いて飛び出したらしい。

「いつか生徒会にスカウトしようと思ったんですけど」

「自分から立候補するなんて・・・すごいですね」

「応援者になってもいいですか？」

「あ・・・有り難いです・・・」

こうして僕の立候補戦が始まった。

第二話、副会長と僕

僕は戸惑っていた・・・

生徒会に入れば責任は重大だ・・・

仕事も厳しい物になるだろう。

だが、副会長を裏切れることは僕にはできない。

それに副会長は僕が入る頃には会長だ・・・

全面的な支援策はあるはずだ。
バックアッププラン

（やらなければ）という思いと使命感が込み上げた。

その放課後だった。

副会長と一緒に歩いてくれたのだ

「僕・・・やってけますかね。」

僕は重くなった口をひらいた。

「大丈夫！副会長様が言った事に間違えはない。」

「はあ、副会長ってそんな方でしたっけ」

活発で今時の娘のような発言だ

僕、とだからか・・・

「で、来週の選挙活動どうするの？」

「えっ、来週ですか……。原稿は考えておきますよ。」

「頑張ってるね、応援してるから」

「はい、頑張ってみます。」

そういうと彼女はさっと駆けていった。

正直、男としてきつかった。優しいとは分かっていても、

少しはどきどきしてしまう。

そのとき、僕から見た彼女はとても平気そうだった。

素直な、彼女の気持ちが羨ましかった。

家に帰ると一目散にベッドには入る。

カーテンから入る夕日が眩しい

二時間ほど仮眠を取り。

僕は原稿を書いていく。

カリカリと鉛筆の先で一文字一文字考えながらの作業だ。

三時間は掛かっただろう。納得の原稿が出来た。

その後は机の上で寝てしまっていた。

第三話、彼女の仕事と告白

起きると、

もう朝だった

身支度して学校に向かう。

行く途中だ、彼女（副会長）に会う。

「おはよう、調子は？」

「うん、原稿は書けたよ・・・」

「じゃあ、放課後、演説の練習しようか・・・」

「ありがとうございます。」

僕は、少し安心した

彼女が肩を押してくれたからだ。

「じゃあ、放課後に」

気づけば学校階段の途中だった。

「はい、で場所は？」

「あまり人目につかないところがいいと思うんだけど」

「じゃあ、理科室はどうでしょう」

「鍵は？」

「理科室の担当が僕の担任なので鍵を貰ってきますよ」

「うん、分かった、じゃあね」彼女はその場を去っていった。

放課後、僕は理科室に行った

だが、理科室に行く途中、数人の先輩に囲まれた

「副会長とどういう繋がりだ！」

「えっ、あの、なんというか、同僚です」

「オマエ・・・なんか、頭クンだよ！」

「ぱすっ」っと音がする目の前にいた

先輩方は倒れていく、

「副会長！」僕は声を上げて走った。

副会長が持っていたのは麻酔型のベレッタだった

「副会長、あなた何者ですか！」

全員を討ち終えたあと、

麻酔針を抜きながら

彼女は口を開く

「この学校の隣、女子校と男子校があるでしょ」

「確か・草見女子校と草川男子校ですよ」

「そう、それと私たちの居る中学」

「三校は摩擦しながら、隣接している」

「だから事件が起^{トラブル}こる前に眠らせるわけ」

「実行しているのは三校の裏生徒会委員。私もその一人。」

「武器調達は・・・どうやって」

「南米、アメリカ、アフリカ、中東からの密輸。」

「僕はどうしたら」

「見てしまったのなら協力してほしい。はい、これ」

渡されたのは・・・

「これってD・E・41じゃないですか!」

「イスラエルからよ、試作品に過ぎないけどね」

「さてと、演説の練習でもしようか」

こんな時によくそんな事を・・・と思いながら、

僕は理科室の鍵を開けた。

「一つ聞きたいんですけど」

僕は口を開いた。

「僕を助けてくれたんですか？」

「見てられなくて・・・それに」

「なんですか」

「初めて見たときから好きで・・・」

彼女は僕に抱きついてきた

彼女の落とした涙が制服の肩にポツリとたれた。

彼女の涙の冷たさに比べて

抱きついてきた身体は熱かった。

彼女の意志の強さなのか・・・

第三話、彼女の仕事と告白（後書き）

ベレッタとは・・・

米軍の正規銃であり最もアメリカでポピュラーなハンドカン

本銃には、彼女・・・の意志の強さだろうか

持ち手部分の塗装が剥げている。

そして本銃は麻醉銃だ

（麻醉銃型はフィクションです）

D・E・41とは

デザートイーグルの41口径の略称。

50口径は有名であり。モデルガン、映画、ゲームで射撃の衝撃により難しさが分かるが

41口径では衝撃はそれ程ない。
ブローバック

密輸先のイスラエルの敵国ヨルダンの過激派が回収した品

。試験品だがとてもない性能を誇る

（麻醉銃型はフィクションです）

性能評価は予想なので気にしないで下さい。

第四話、婚儀Ⅱあれ？（前書き）

随分おかしくなって来ましたねえー

随分、脱線したなー

最初、これを思いついたときには青春とミリタリー面をあわせた物がいいな

まあ、お前、ヲタかよ！と突っ込んだ方も居なくは無いです。

それに後々なのですが何故に麻醉銃などを使い止めなければならぬのか。

（まあ、は茶目な設定もありますが）

さて、窮地に追い込まれました。

ということで第六話から

ストーリー分岐させたいと思います

（なにゲームみたいな事やってんだよ！）と思われませんが・・・「承知の上」

やらして頂きます。

分岐は二つ、

一つ目は第一話、第二話と同様な青春を描きます。

（デートとかも在るかもしれませんがね）
見たいですね

二つ目は学校紛争を止めに掛かります。

その他、他学校生徒会室まで会議の為、極秘出張したりもします。

大体、やろうとしてる事が解った方もいるでしょう

でも彼Ⅱ中井くんには

極上の不幸を味あわせます。

（こっちはあまり見ないでください）

作者の罪の為にもすべて書きます。

第四話、婚儀Ⅱあれ？

「ごめん、急に・・・」

「いや、気持ちは変えられませんよ。でも、年下好きですか」

「う・うん」

「副会長、じゃあ、練習しましょうか？」

それから、僕達は練習を始めた。

やはり、同僚というよりは恋人同士だった。

しかし終わってからだった。

「会長！」彼女は声を上げる、

「よう、清水、元気やったか！話は聞いたぜ、これがお前の彼か、結構可愛いな」

馬鹿野郎！告られただけだ！

会長はどんな神経をしてるのか・・・

「オッと自己紹介が遅れたな、俺は水谷 武だ」

「今日は何のよう」

「俺は今日で任期終了だ。

挨拶がてらに相棒をすっ飛ばしたくなっとな」

「いいよ、でも、彼はどうしよう」

「ついでだ、俺の前で「あれ」をしてくれ、この通りシャンメリーもある俺の儀式はそれからだ」

「うん、」

彼女はしゃがみ、銃口を下に向けるように指示した。

僕も同時に始める。

ま、誓いの儀式といった所だろう。

銃口をコッキングする。

マガジン（装弾）には何もない。つまり空撃ち

「カチャ」つと音がする

普通のカップルで言うところのキスの瞬間みたいな物か？
会長め仕向けたな！

その時、同時に二つの銃口（身体）が折り重なる

「バスン！」

空撃ちはほぼ同時だった。

僕と副会長はため息を漏らす

緊張のあまりだ

仕事を終えたD，E，とベレッタは静かに

香ばしい火薬の煙を狼煙のろしのように立てていた。

「ポン！」と会長がシャンメリーを開けた

「お前の彼、上手いな」

「まあ、婚儀あれにふさわしいがな」

大体は分かっていたが13歳で婚儀の誓いをやらされるとは・・・

第四話、婚儀Ⅱあれ？（後書き）

ここらで次回予告を

婚儀のあと会長の儀式が始まる

副会長は彼の過去について話す

そして僕はすべてを知る

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7764f/>

武装生徒会～君と僕の日々～

2010年10月28日03時12分発行